食味を追求していかないといけないということで、取り組んでいます。
飯田地区はほとんどがＪＡの共販ですが、今は、ＪＡと一緒に農家も量販店に出向いて、直接生産者の声を届けたり、消費者に飯田に来てもらって収穫体験をしてもらったりもしています。

元気な農業経営は健康から　ー健康モデル協議会ー

健康教室（セラバンドを使ってストレッチ体操）
健康診断の結果を基に行う健康相談会の一環として「健康教室」を実施しています。

現在も10時と３時にスピーカーから農民体操の音楽が流れています！

【聞き手】健康モデル協議会というのは、ユニークな活動ですね。
【飯田集落】ハウスが昭和48年頃から導入されてきました。１億円借金して鉄骨ハウスを作った先駆的な農家もいました。借金返さなといけないし、睡眠時間４～５時間で１年中働いてた感じでした。風邪や腰痛、肩こりなど健康問題が50年頃から表面化してきて、「これはハウス病だ、対策を何かしないと」ということで県にも掛け合い、モデル事業に取り組みました。その後も、自分たちで続けよう、と協議会を作って、営農と生活・健康の両輪でやろう、ということで現在まで続いています。

【聞き手】今はどういう活動をされているのですか。
【飯田集落】現在の会員は、95名の施設野菜農家。発足当時からの活動を、「これはいいこと」と継続しています。年１回の健康診断、健康まつり、親睦旅行などです。**「自分の健康は自分で守る」をモットーにしています。元気でないと働けないですからね。**飯田集落も高齢者が多くなっているけど、健康でみんな頑張っています。これは自慢できることですよ。

八幡宮は心のきづな

地域の核　「飯田海老山八幡宮」

【聞き手】地域の核として八幡宮を作られてますね。
【飯田集落】今も年６回の大祭をやってます。福寿会（老人会）の人たちが主に清掃をしてくれているし、神楽同好会によって神楽も舞われています。ぼんぼら会の人たちが、神楽同好会の後継者として育ってくれてます。地域の人たちの心が繋がっていっていると思います。

【聞き手】ぼんぼら会は世代交代されているのですか。
【飯田集落】そうですね。今40名ぐらいで、一応40歳以下ぐらいの青壮年となってますが。地区の文化祭や盆踊り、運動会など自治会と一緒になって頑張ってます。消防団活動は中心になってやっています。

団結力を活かして

【聞き手】これまでの長い活動で、「自分たちだけでもやっていこう」というパワーはどこからきていたのでしょうか。
【飯田集落】ここは昔水害の常襲地帯だったんです。この地域が水に浸かると、野菜が不足して他の地域の野菜が値上がりするんです。**「どこにも負けない野菜の産地を作ろう」を合い言葉に合意が形成されていきました。**「お嫁さんが来てくれて喜んでくれる地域にしよう」という一面もありました。行政にも相談しながら、集落一丸となって生産と共販体制をとり、近代化を進めここまでやってきた、という感じです。
天皇杯受賞後ですが、平成６年に、天皇・皇后両陛下が、ここを訪れてくださったんです。大変うれしい出来事で、誇りに思っています。
受賞やこんな事が一つの機会になって、さらに団結力が深まっていきました。実は、この高津地区には昨年で78回を数えた歴史ある市民体育大会が継続されていますが、飯田地区はそこで10連覇という快挙を成し遂げました。これも団結力の賜物と、とてもうれしく思っています。

神楽の披露

市民体育大会で10連覇

【聞き手】課題はありますか。
【飯田集落】飯田地区でも、少子高齢化は進んでいます。後継者がいるとはいえ、やはり後継者不足は課題です。それから、今のハウスも老朽化してきています。更新をどうしていくか、これからの課題です。

【聞き手】今後の抱負を聞かせてください。
【飯田集落】とにかくこの地区は団結力があります。この**団結力をあらゆる方面に活かしていきたい**と思っています。また、安心・安全な野菜づくりを継続しながら、生活の安定を図り、子ども達が住みたくなるような集落を目指したいと思います。

城市会長

**「いきいき笑顔　野菜の里　飯田」は元気な町です。
自信を持って言いたいです。**

水害常襲地帯というハンディを克服し、住民が一丸となって新しい経営に取り組み、飯田の顔となるアムスメロンを主体とした施設園芸の産地を作り上げています。地域の団結力で、農業経営・生活環境の両面から取り組む姿勢を一貫して継続し、息の長い活動を続けています。

※　「飯田集落」へのお問い合わせは、益田市農林水産課（TEL 0856-31-0100）へご連絡ください。

地域の素晴らしさを守る
～ 憩いの公園 ー 森藤ふれあいランド ～

森藤村づくり推進協議会の方々

徳島県吉野川市鴨島町
「 森藤村づくり推進協議会 」
会長　桑田　トシ江　さん

【活動の概要】

森藤地域（８集落）は、鴨島町の南部に位置し、市街地にほど近い平地農村地帯である。農業は米や野菜を中心にした生産が行われているが、地理的条件から兼業が多い。

森藤地域は、昔からまとまりのある地域であった。昭和40年代には八幡の産地形成を進めていたが、自由化による打撃や高齢化等により、今後の地域全体を考えていこうと、61年に「森藤村づくり推進協議会」を設立した。協議会は、自治会や各団体が一緒になり、風土を生かした豊かで住み良いむらづくりへの取組を始めた。

活動は、人づくり、名所づくり等を目標とする「森藤村づくりビジョン」に基づいて、全住民が参加しながら人材マップ、名所マップを作成したり、ふれあい大会を開催したりしてきた。また、イベントやふれあい活動が実施できるような広場をという住民の願いにより、「森藤ふれあいランド」を整備した。以来協議会が管理し、清掃活動等を行い、常に気持ちの良い公園として多くの人に利用されている。

協議会は全住民参加の会費制をとっているが、これにより活動の底辺が広がり、共同の精神による地域一体となった活動の展開が可能となっている。

「むらづくりは人である」との認識のもと、人づくりを通じて活動を広げていく姿勢は、住民のボランティア精神によるものであり、平成６年度に日本農林漁業振興会会長賞を受賞している。

その後も、ふれあいランドの中に山のわき水を引いて設置した「龍王水」の水汲み場を整備したり、ふれあい農園で小学生の農業体験学習を行う交流活動を始めたり、また自主防災組織を立ち上げる等、活動を広げている。常に、森藤地域全体で情報を共有する体制をとっており、次の活動に繋いでいる。

現在は、地域内８自治会の連携のもと、ふれあいランドの管理を始め、学校との連携活動、自主防災等、地域全体の人のつながりを大事に、活動を続けている。

憩いの場として　ー森藤ふれあいランドー

【聞き手】森藤ふれあいランドについて教えてください。

【森藤協議会】このふれあいランドは、むらづくり活動をしている中で、森藤住民の憩いの場として、町の支援を得て整備してきたものです。昔は銅鉱山の鉱石置き場だったんです。広場や遊具、ふれあい農園、龍王水などがあります。この公園の管理を協議会が行っています。だいたい２ヶ月に１度、20数名出て、除草など清掃活動をしています。

協議会が管理している森藤ふれあいランド

【聞き手】地域の方の利用が多いのですか。

【森藤協議会】地域の人も利用しますが、他からの利用が増えています。例えば芝の広場があるんですが、ここでは毎朝、15～20人の人がグランドゴルフを楽しんでます。鴨島町内の人たちですね。龍王水は、吉野川市だけでなく、他からも多くの人たちが汲みに来られています。

【聞き手】龍王水についてもう少し教えてくれますか。

【森藤協議会】この上の方で、地滑り対策のボーリングをした際にわき水が出たんです。せっかくだからということで、この公園までパイプを引いてきて、近くの龍王神社にちなんで「龍王水」と名付けました。水質が非常にいいということで、評判になって多くの人が来られています。日曜日とかは３時間待ちみたいな状態ですよ。でも、森藤の良さを感じてもらってるんではないかと思います。

ふれあいランド内にある龍王水

とってもおいしい「龍王水」です！

農業の素晴らしさを子ども達に

５年生と一緒に稲刈り

【聞き手】小学生とのふれあい交流は、どのようなことをされているのですか。

【森藤協議会】４年ほど前から、農業の素晴らしさを子ども達に伝えたいと思い、森山小学校の３・４・５年生を対象に農業体験学習を始めました。これには、農業体験を通して、子供たちの健やかな成長を願うことと一緒に、地域住民の連帯意識を深めることや学校と地域の交流を深めるなどのねらいもありました。

米は桑田会長の田んぼで田植え、稲刈り、脱穀までします。ふれあいランドの中にあるふれあい農園の方で、じゃがいもとさつまいもの植え付けと収穫をやります。協議会のメンバーと子ども達で一緒に汗を流して楽しくやってます。そのあと、学校で収穫祭をされるんですが、その時に招待されて、子ども達と一緒に給食を食べたりしています。

4年生と一緒にじゃがいもの収穫

【聞き手】農業の指導は誰がされるのですか。
【森藤協議会】協議会の役員が中心に参加してますが、みんな農業やってるから、みんなが先生ですよ。

【聞き手】子ども達と一緒で楽しそうですね。
【森藤協議会】じゃがいもの収穫の時に、おやつにと、事前に掘ったじゃがいもをふかして準備してたんです。これまで10年間くらい全く食べることができなかった子が、おいしい、と言って食べてくれたことが、とてもうれしかったですね。家に持って帰ったじゃがいもで、それぞれ、肉じゃが作ったりポテトフライ作ったりして食べてくれたようです。
　あとで子ども達たちが、お手紙をくれたりします。これもうれしいですね。

小学校での収穫祭（収穫したじゃがいもでカレーライスの給食を一緒に）

子ども達からのお礼の手紙

楽しそうな子ども達に、協議会の人達もうれしさいっぱいです！

地域の力を結集して　ー森藤ふれあい大会ー

【聞き手】森藤ふれあい大会は、長い活動のようですね。
【森藤協議会】毎年８月の第３土曜日に開催していますが、昨年で22回を迎えました。協議会主催の一大イベントです。ここまでやってこれたのも、みなさんのおかげと感謝しています。
　夫婦合わせて150歳を迎えられたご夫婦を「いきいきチャンピオン」として表彰したり、防災訓練したり、昨年は小学生のかかしコンテストの表彰もしました。毎年のお楽しみは何と言っても、「あめごのつかみどり大会」です。ふれあいランドの横に三谷川というきれいな川があります。そこに、あめご600匹を買ってきて放流して、子ども達につかみどりをさせるんです。それは喜んでますね。

あめごのつかみどり大会

【聞き手】他の地区からも参加されるのですか。
【森藤協議会】これは、森藤だけでなく、広く呼びかけています。毎年170～180人ぐらい参加してくれています。子ども達も50人ぐらいいると思いますよ。

人と人とのつながりを大事に

【聞き手】むらづくり活動で一番大事にしているものは何ですか。
【森藤協議会】人と人とのつながりです。森藤地域には８自治会ありますが、協議会では、毎月１回の定例会を各自治会が持ち回りで担当し、むらづくりの活動やその他いろんなことを話したり勉強会をしたりしています。だから、地域全体の情報の共有ができるし、意識も高まります。自主防災組織も立ち上げましたが、やはりいざと言うとき、人のつながりがないと動かないですからね。
　各自治会では、会長の任期は２年で、「副会長から会長へ、そして会長は１期で交代」というのが多いです。数期やってる人もいますが、あまり長いとその人任せになる弊害もあって、交代しながらみんなを育てていく、みんなで分担しながらやっていく、というように考えてます。だから、会長を中心にみんなが地域の一員として頑張っています。
　それから、ふれあい大会や清掃活動の時など、地域の女性たちが、家にあるものや周辺の山で採れる山菜などを持ち寄って、郷土料理を作ったり八朔ジュースを作ったりして振る舞っています。皆さんが楽しみにしています。女性たちの協力や支えも、ここまでくることができた一つの大きな力だと思っています。

小学校での防災訓練指導

【聞き手】課題はありますか。
【森藤協議会】この地域は市街地から近く世帯数は以前とあまり変わっていませんが、農業に携わる人が少なくなり、若い人の活動への参加が少なくなっている傾向があります。

【聞き手】今後の抱負を聞かせてください。
【森藤協議会】これからも地域全体の人のつながりを大事にしていきたいです。龍王水は守っていきたいし、小学校との交流活動も続けていきたいですね。

桑田会長

地域の仲間と共に助け合い、手を取り合って、
これからも森藤地域の良さを守り続けていきます。

８集落からなる森藤地域は、各自治会がそれぞれの役割を分担しつつ、協議会として地域全体の活動を行っています。豊かな風土に恵まれた地域の良さを、公園の管理や小学生との交流活動等により広め、共に助け合いの協力精神を軸として、活動を続けています。

※　「森藤村づくり推進協議会」へのお問い合わせは、吉野川市農業推進課（TEL 0883-22-2228）へご連絡ください。

「仁保方式」でむらづくり
～ 自治会で運営 ― 道の駅「仁保の郷」～

仁保地域開発協議会の方々

山口県山口市仁保
「 仁保地域開発協議会 」
会長　山本　繁正　さん

【活動の概要】

仁保地域（23集落）は、旧山口市の最北端部にある中山間地域で、三方を山に囲まれ、北部は山間の谷間、南部は平坦な地形である。平坦部では水稲、山間部では野菜や菊を中心に生産が行われている。

仁保地域は昭和45年頃には急激な人口の減少で、中学校の廃校問題が出てきた。このままではむらはどうにもならないと、地域の全ての組織を網羅して「仁保地域開発協議会」を作り、仁保のあるべき姿を1年がかりで作った。そこで作り上げたのが、「近代的いなか社会の創造」という理念である。

理念に基づき、まず生活・生産基盤を整備した。「不便な所から良くしていく」という方針のもと、「工事の用地は自治会で確保する」という仁保方式をとり、道路整備、ほ場整備等を順次実施していった。

一方、農業生産面を元気づけようと、昭和63年には全集落に「営農改善組合」を設立し、自治組織と表裏一体となったむらづくりの推進体制を整備した。仁保農協では平成元年から生協との提携による産直も始まり、交流活動等も活発になっていった。

平成８年には、更に発展させようと、活動の拠点となる施設づくりを進める「道の駅構想」を決定した。協議会では、設置に向けたアンテナショップとして農協を事務局とした「彩り市」（朝市）を開設し、また、専門部会を設け、具体化に向けて地域の合意形成、行政との調整を進めていった。そして12年には、協議会役員が出資の中心となった(有)仁保の郷を設立し、道の駅「仁保の郷」をオープンさせた。「彩り市」も(有)仁保の郷の運営となり、道の駅全体が賑わいのあるむらづくり活動の拠点となった。

地域住民がそれぞれの役目を果たしながら、「仁保の問題は仁保の住民で解決していく」という高い住民意識で長年にわたり幅広いむらづくり活動を行い、平成13年度に天皇杯を受賞している。

現在も、「仁保の郷」の運営を中心に、地域全体の活性化に向けて常に問題意識、目標を持ち、その達成に向けて一歩一歩着実に前進している。

「近代的いなか社会」を創ろう

【聞き手】「近代的いなか社会」が目指したものは何ですか。

【仁保地域】中学校が廃校になりそうになって、むらをどうにかしようとみんなで協議会を作って、山口大学の協力も得て「近代的いなか社会」という理念を作りました。生活環境と生産基盤は徹底的に近代化するけれど、古きよきいなか社会の人情はどこまでも大事にしていこう、ということです。1,000戸、4,000人を目標にしていましたが、人だけ増やせばいいというものではなく、地域にちゃんと入ってくれる人、祭りとか一緒にやるような人を受け入れていきたかったので、住宅団地の話とかは断りました。**農業を大事にする、条件の不利なところから整備する、子どもの教育に力をいれる、という考え方をずっと継承して、むらづくりをしてきました。**

仁保地域の上郷集落

【聞き手】独特の「仁保方式」とはどういうものですか。

【仁保地域】例えば道路の拡張をする時に、一番ネックになるのは用地ですよね。うちは**用地問題を全て自治会で解決してから陳情に行くんです。それが「仁保方式」と言われるものです。**各集落の世話人が、実際の買収場所も価格もわからない段階で、関係者全員の委任状をとるんです。世話人はそれは大変です。でもそれをやらないと自治会は受け付けないから、要望が通らないんです。苦労しますが、そうやって今では指導者に育っています。このやり方を47年の災害復旧の時からずっと今もやってます。こんな地域は他にないと思っています。うちの自慢の一つです。

それからもう一つ、「不便なところから良くしていく」という方針もあります。道路もほ場整備もみんな、ほっておいたら消えてなくなるような集落からやってきています。これも特徴の一つだと思います。

【聞き手】よくみなさんが同意されますね。

【仁保地域】最初は色々ありました。買収価格が安くなるのではないかとか言う人もいて、他地域の例も調べましたが、うちの方が高いんです。行政も、これだけ努力して協力するところを安く買いたたくことはありません。その辺のことが、みんなに理解されてきて、大変ありがたいことです。

農業を元気にしたい　―道の駅「仁保の郷」―

道の駅「仁保の郷」の看板

【聞き手】道の駅構想のねらいは何だったのでしょうか。

【仁保地域】近代化の方は順調に進みましたが、農業がどうにも元気がありません。ここは人口の３割が高齢者なんです。前は野菜を作っていましたが、個々の農家で規模が小さくて、もう止めてしまってました。何にもすることがなくて家でも肩身が狭い。何とかしたい、と思いました。「もう一度野菜づくりの技術を活かして元気になってもらいたい。そして**農業の沈滞ムードを打破しよう。**」というのが、第一のねらいでした。それから、当時郵便局や農協やみんなが集まる所がばらばらで、１ヶ所に集めようというのも目標でした。今年度にはコミュニティセンターもできて、ワンストップサービス（これは後から聞いた話ですが）については、100%目標が達成できました。

地域の拠点　道の駅

道の駅の直売所「彩り市」

新鮮な野菜や花が毎日持ちこまれます。
どんどん売れていきます！

【聞き手】自治会の経営ということですが。

【仁保地域】珍しいでしょ。協議会役員が中心に出資した(有)仁保の郷が運営しています。だから、道の駅と地区の人たちを結び付けるために、出発するときに菊の一戸一鉢運動を始めたんです。全戸に２鉢分の苗等を配って育ててもらい、１鉢を道の駅に出してもらって、毎年秋の道の駅を彩っています。一昨年の山口での国民文化祭の時、出展を頼まれて出したんですが、これが好評で、「来年もやるぞ」なんてみんな大層盛り上がりました。結局それ以来なんか行事を見つけて毎年やってます。みんなボランティアですよ。みんなで盛り上がるところがうれしいわけです。ゆくゆくは、ノウハウを蓄積して、「彩り市」に出荷する生産活動に繋げていければと思っています。

【聞き手】大成功のようですね。

【仁保地域】おかげで大成功です。年間70万人ぐらいのお客さんが来てくれてます。「彩り市」には230名ぐらいの出荷者がいますが、中にはほんと腰の曲がったお年寄りが、ほんの少量をうれしそうに持って来てくれています。定年と同時に帰ってきて、野菜を作ろうという人も増えてきました。もちろん品物はチェックします。悪いところは、出荷者協議会はありますが、直接道の駅の駅長から生産者に指導しています。

成功要因の一つに駅長があると思います。構想当初は、通行量の少なさから反対意見もあって、成功するためには駅長の人材を得ないといけない、ということでかなり考慮しました。いい人材を得たんです。

地域で守るスクールバス

【聞き手】道の駅の運営以外にはどのような活動をされているのですか。

【仁保地域】仁保では昭和58年からスクールバスを走らせています。一番の過疎地域とそこから下の地域に向かって。これも自治会の運営です。一部市の補助がありますが、あとは、地元の住民がバスに乗ろうが乗るまいが平等に金を出し合って運営してます。これもあまり例がないと思います。「おれらの集落の足だ」というみんなの気持ちです。

それから、当初は仁保農協が主体でやっていた「仁保大農業まつり」も、今は自治会が主体となっています。始めは地区民中心の祭りでしたが、むらとまちの交流の場として道の駅で開催されるようになり、大変な賑わいをみせています。

地域の足　スクールバス

汗と知恵を出し合って

【聞き手】住民の皆さんのむらづくりへの参加意識がここまで高いのはどうしてでしょうか。、

【仁保地域】「誇り高き仁保」と良く言われています。昔から地域全体でやってきました。それと、各集落の世話人がほとんど10～20年選手です。むらづくりというのは１年で完成するということはないから、そういう面では仁保は恵まれていると思います。

【聞き手】課題はありますか。

【仁保地域】農業全体からみると、やはり手詰まりの状態です。20代30代の専業農家がなかなかでてきません。

【聞き手】今後の抱負を聞かせてください。

【仁保地域】各集落で集落営農、法人化を目指す方向に向かってます。具体的に動き出しているところもあります。

もう一つ力を入れているのが、縁あって昨年から北海道の夕張と縁組しました。夕張メロンの直売も始めましたが、有志で勉強に行きました。仁保の方がまだいいと思えるぐらい農業をやるには条件の悪い所で、でも驚くべき収益を上げて後継者がどんどん育っていました。刺激を受けて若い者を勉強にやるように計画しています。これを突破口に、**汗と知恵を最大限出して一生懸命やったら、仁保は変わると信じています。**

それから、一番の山間部、限界集落と言われている集落に文学者の生家があります。要請が通って、今年度市が修復することになりました。民泊を中心に地域活性化の拠点にしようと、維持管理は自治会でやることで今具体的に動いてます。我々が一番願っていた上郷集落が本当に元気になると、将来展望も開けると思っています。

多くの人で賑わう仁保大農業まつり

住民の菊の鉢で彩られた道の駅

山本会長

住民がみんなで動かしている仁保地域です。

23集落という広い地域を住民自らが自治組織によりまとめ、目標に向かって日々活動しています。自分たちの地域は自分たちで、という考えのもと、道の駅の運営を中心に、新たな課題にも自主的に対応し、仁保地域全体の活性化に取り組んでいます。

※　「仁保地域開発協議会」へのお問い合わせは、道の駅「仁保の郷」（TEL 083-929-0480）へご連絡ください。